

稲村から発した軍勢は、よもや義堯が大胆にも北条と結んで兵力を増し、しかも立ち向かってくるとは考えもしていなかった。

その心の油断が、勝敗を決した。

「敵襲！」

思いがけぬ義堯の反撃に、稲村からの軍勢は浮き足だった。

八月二日に行われたこの戦いを、妙本寺砦の合戦という。

緒戦に勝利した義堯に加勢した北条水軍の山本太郎左衛門は、その二日後、玉繩城主・北条為昌から感状を与えられている。

妙本寺砦の敗戦は、里見義豊の胸中を不安にした。たかが小倅という侮りが、義堯に敗れた原因である。

(まさか北条と通じるとは)

義豊も考えも及ばなかった。

その不安に、追い打ちをかける報せが届いた。山之城の攻略に失敗したというのだ。攻め手の糟谷石見守は、僅か二三歳の正木十郎に討ち取られたという。その背後から攻め立てた正木時茂の軍勢が、遂には義豊方を撤退に追い込んだのだ。

(権七郎は無視できないが、正木の倅らも捨て置けない。なんとということだ、儂は挟まれている事になる)

目先のことで曇っていた眼が、このようなことで足下を掬われる形になろうとは……。

「権七郎が頼みとする北条を釘付けにすれば、たかが小倅は取るに足らず。三浦半島へ奇襲を掛ければよろしいことかと」

鎌田源六が進言した。海賊衆を敵に廻しているとはいえ、好きに動かせる舟は稲村城下の運河に係留されている。

「権七郎側の舟になりすませば、三浦まで赴くことは易いはず」

「水主は大丈夫か？」

「万全でござる。鎌倉攻めのことを模倣し、三崎を火攻めにすれば、戦果は十分かと」

「よし、存分に蹴散らして参れ。権七郎が火討

ちを行えば、北条側も疑念を抱く。支援なき権七郎など、敵ではない」

義豊は断じ、即座に船団が編成された。

九月六日、江戸湾を押し渡った船団は、津久井の浜を焼き払った。これに対し北条側の対処は冷静で、数隻がたちまち沈められた。

捕らえられた兵の口から、この船団が義豊のものであるとすぐに露見したため、義堯との関係には些かの問題も生じない。

制海権は、依然として義堯側にあった。

義豊の焦りは募った。

義堯に同心する者は日に日に増した。すべては、里見実堯の人徳であった。

(なぜだ……在地豪族に媚びたゆえか)

戦力が振るわない現実には、義豊は苛立ちを隠せなかった。

「稲村では、地の利が難し」

そう判断した義豊は、妹婿・一色九郎のいる滝田城へと移った。

滝田城本丸に入城した義豊は、国内に触れを出し

「我と志す者は」と集った。

しかし、新たに駆けつける者はなかった。

そのときである。

「兄上、兄上はいずこ」

美が駆け込んできた。

「あれほどお願いしたのに。なぜ我が殿を巻き込むのです！」

「戦さだ。女の出る幕ではない」

「滝田を巻き込まないで欲しいと云うておるのです！」

「黙れ。九郎殿、こやつを引き摺りだせ」

一色九郎は渋々それに従った。とにかくおとなしくしてもらうため、座敷牢へと入れるしかなかった。

「美、済まぬ」

一色九郎は詫びた。

「この戦いの大義はどこにございますか？殿の

進退を思えば、こんな兄に肩入れは……」

「しかし、いざというときは頼むと、先代に頼まれております。ここで見捨てては……儂は主を捨てた者という誹りを被る」

「犬死にだけは、してはなりませんぞ」

「もとより」

美は泣き崩れながら、義豊を憎む罵声を吐き続けた。この仕打ちは何事……何事、と。

滝田城の縄張りは平久里川を南北に見通せる拵えだ。

その対岸半里北には番所があり、この長蛇な平地に広く手勢を配することが適う。また、尾根を伝えれば大津の宮本城に至る。すでに実堯を討ち取ったのちに義豊方が抑え込んでいるから、相互連携も易い。

宮本城からは造海城の様子が、随時報告された。その点でいえば、滝田城はまさに安房拠点の中心地である。

ただし、その報せは、決して芳しいものではなかった。

その後も義豊は敗戦を重ねた。

正木勢は東の壁となって、義豊方の介入さえ阻んだ。義堯の侵攻も防ぎきれず、九月二四日になると、義豊の軍事拠点は僅かに滝田城のみになっていた。

なぜこれほどまでに、敗退を重ねてしまったのか。

かつての奉行衆に近かった者たちは、合戦経験が豊富であった。用兵術にも長けていたし、何よりも共通の目的である

「仇討ち」

という大義名分に燃えていた。

御傍衆は個々の武辺に優れているが、総じて合戦が不得手である。数で押し出すくらいしか取り柄がない。

「この滝田城は簡単に落ちませぬ。ご安心を」

そう進言する一色九郎の言葉を、義豊は素直に領けなかった。

二七日、義豊は主立った者たちを集めて

「如何するか」

と打診した。芳しい答えはない。

やがて、誰いうともなく

「真里谷の入道怨鑑を頼るべきかと」

という気運になった。真里谷信保が後継者争いで腐心していることを、義豊たちはまだ知らない。しかし、このことは決定事項とされ、一色九郎に報されることなく、やがて義豊たちは滝田城から忽然と姿を消した。

「我が殿を利用するだけ弄んで、なんという人でなしじゃ」

美は義豊の為され様を罵倒した。

十十十

犬掛へ(5)

夢酔 藤山